

親に気をつか子

日常生活に心のゆとりのなきが反映してか、どうも昨今の親は子どもが甘えるのを良しとしないところがありはしないだろうか。自分自身の生活に追われてしまい、育児か

智子は見るからに利口そうな印象を受けたが、母親の話とくに訴える様子は見えなかった。にうなずいているのが筆者には気になったが、自分からは

甘えられない子とその親の心理

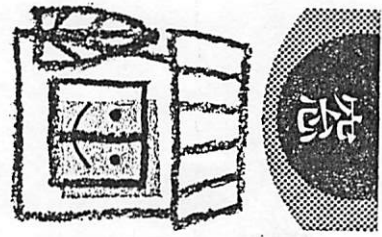
小林隆児

——智子(仮名、八歳(小学三年))——

先日、智子が母に連れられて筆者の外來にやってきた。もともとおませでしつかりした子なのに、夏休みに親戚に

母親が心配そうに話しているそばで、智子は母親の顔を眺めながら、特別不安そうな表情を浮かべるわけではない

昨年入院生活を過ごしてすっかりラジカセやドラマでもイヤホンを通して頭に入ってくる聴覚像は大変生き生きして



り解消されずに残っている。二エースで、他局のアナウンサーがう話しているかは定かではない。夜10時30分

母の実家が近く、今も実母が住んでいた。次郎が小学三年の二期終わりに南園からF市に転居。

甘えを見せない子

それなら大丈夫でしょうと大鼓判を押し、治療は終了した。たいと語るまでになった。それを聞いたのち、筆者はもうたど母親は安心しきった様子で、これからもそうしてやりつても不平を言っていたのに、まったくそれを言わなくなると、一週間後には今まで「お兄ちゃんばかり」とい親が羨い寝をしてやるようにと簡単な助言をしておいた。そこで、筆者は夜はだれにとっても一番心細い時だから母でしたいに娘の気持ちが変わり始めている様子であった。ができるようになっていったのだが、このような流れの中然な流れで母親は自らの娘との関係について振り返ること面接で特別の治療的工夫をするまでもなく、ごくく自うにしていたということにも母親は気付くようになった。いけないからと、早い時期から抱くのを努めてやらないよ始めた。さらには、智子に対しては乳児期抱き癖がつくと

では、神経質でおませな子であるという。周囲の人々に配感的でとても気をつかい子ともらしからぬふうだという。学校でも家庭でもなにか新しい行事や計画があると気になり始め、事前にひとつひとつスケジュールや段取りを母親や周囲の人々に確認しないと安心できないという強迫的な一面があることもわかった。ただ、筆者がとくに驚かされたのは次のエピソードであった。二、三歳のころ、母親がこの子を昏殺させようと思つてあやしてやろうとするど、「お母さん、いいよ。自分でするから」と言つて遠慮する気つかいをしてたのを母親は鮮明に覚えていて、さすがにそのときはびっくりしたといううのだった。最近の様子を尋ねると、昨年の冬、転居のため同じ市内の小学校に転校してからいまだ学校になじめずについて緊張状態が続いていることもわかった。診察してみると、筋緊張が高く、こちらの意図を素早く察知して振るまう様子が痛々しく感じられ、彼女の肩をきすつてやると気持ちよさそうに反応したのは印象的だつた。筋緊張を和らげるために、心理療法士に依頼して自律訓練の指導を数回してもらった。そのときには子どもよりも母親の方がいたく気乗りし、積極的に治療に取り組んで

「フツフツするのにな、無理矢理行かせて！ 母さんがいなだにもかかわらず水泳に行かせられたことを思い出してけられるように工夫していった。すると、先日微熱があつ治療の初期には、次郎から母親に思い切り気持ちをぶつを設定して治療を開始した。

者に切々と訴えているのを見て、母子間のコミュニケーションを促進することが大切だと判断し、母子合同の面接基礎にあることは確かだったが、母親に訴えたいことを筆外来に受診となった。診察の結果から次郎には学習障害がに抜毛がひどくなつていき、不登校が目立ち始めて筆者の出現してきた。F市に移つてからは学校になじめず次第小学一、二年はとても楽しかったが、三年の頃から抜毛をせていた。患つきは早く、大人顔負けのことを言つては大人を感じ心が自分にとっても似ていると思つていたらしい。しかし、知ライラさせられることが多かったが、内心はそうした一面も示さなかつたという。母は子どもの気持ちがあつかめずイ続いていた。幼児期から自己主張をあまりせず、母に甘えいた。夜原が小学校低学年まで続き、爪かみは現在もおおく読み、他児と遊ぶことは少なく、干渉されるのを嫌つてころぶ子どもで、運動が苦手だった。図鑑などの本をよ

いるのがとても印象的であつたと担当の心理療法士が語っていた。母親はいつもこんな調子でつい自分中心に行動し、子どものペースになかなか合合わせることができないのであろうと推測された。しかし、母親はそのことをとくに気にかけている様子でもなく、そのことを筆者が指摘しても悪びれる様子は見られなかつた。ただ、この母親はこちらの指摘を素直に自分の問題として受け止められる人であつた。恐らく母親自身も自分の態度に自信がなく心細かつたのであろうか、数回の面接を重ねるうちに、母親の方から自分の感じるところを積極的に話し始め、自分の問題として受け止められるようになった。自分も神経質で細かいことを止められるようになってきた。自分も神経質で細かいことを気にし、家事でも一旦やり始めると最後までやらないと気が済まず、「いつも大掃除になつてしまふ」というのがあった。そのため几帳面すぎる性格で自分でも問題があると感じていて、夫からもその点を指摘され、少し要領よくやれと言われることも少なくないことも明らかになつた。智子が家事に没頭している母親に「お母さん」と声をかけても、母親から聞き返されると、「いや、先にお母さん(仕事)やって」と気づかつてしまひ、自分の気持ちはずぐに引込めてしまつていたことを母親は思い出し出して話し

子どもが幼児期母親に甘えられなかったことが現在の症状にいかほど深い影響を持っているかを、これらの症例はわれわれに教えてくれている。そのポイントをまとめておこう。①子どもは甘えたくても甘えられない状況が存在していること。②母親が子どもを包み込むような心のゆとりを失っていること。③母親の心のゆとりなき原因にはさまざまなレベルの問題が潜んでいること。④母親自身の過去の親子関係が現在の親子関係を強く規定していること。⑤母親は過去の自分を振り返ることによって心の自由を取り戻し、子どもとの共感的関係が蘇ってくる。

甘える子どもと甘えさせてくれる母親

子どもが幼児期母親に甘えられなかったことが現在の症状にいかほど深い影響を持っているかを、これらの症例はわれわれに教えてくれている。そのポイントをまとめておこう。①子どもは甘えたくても甘えられない状況が存在していること。②母親が子どもを包み込むような心のゆとりを失っていること。③母親の心のゆとりなき原因にはさまざまなレベルの問題が潜んでいること。④母親自身の過去の親子関係が現在の親子関係を強く規定していること。⑤母親は過去の自分を振り返ることによって心の自由を取り戻し、子どもとの共感的関係が蘇ってくる。

泣いているんだぞ。苦しいのにわかってくれないうと母に泣いて抗議するのだった。母はそんなときに黙って受け止められず、「どうしてほしいの」と次郎に盛んに言葉で説明を求めていた。次郎の気持ちからわらないもどかしさが感じられた。

さらに話をうながすと「学校はたまには休ませて下さい。こちだつて困っていることはあるからね」と母への気兼ねを交えながら自分の要求を大粒の涙を流しながら語ったところ、母も涙ぐむようになってきた。ここで私は初めて母の感情を取り上げる、母自身軽居後まもなく引越しよう病になっていたことがわかり、暖かい土地から冬のF市に来たことも関係していたようであった。母子ともにカルチャーショックを受けていたのである。

その後回数の面接で次第に母親自身の心の問題を取り上げていった。三回目に「お母さんは子どもの訴えを懸命に読んで読得しているようにみえますね」と筆者が母に指摘すると、自分も親にいつも気を使って遠慮していたこと、親の期待に応えようとする気持ちも非常に強かったこと、小学校のとき、同性の友だちにはほとんど逃げ込めず、男の子とばかり遊んでいたことなど、母自身の子ども時代が語られるようになってきた。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

母親が子どもの甘えを受け止めることは、けつして一方交流が生まれてくるようになる。

その後、次郎の食欲は回復し久しぶりに学校給食をと

その後、次郎の食欲は回復し久しぶりに学校給食をと

その後、次郎の食欲は回復し久しぶりに学校給食をと

(大分大学助教授)